

台風に対する備えを行いましょう

台風襲来の本格的なシーズンになりました。また台風以外にも、ゲリラ豪雨等、天候が急に荒れることがあり、大雨や強風に対する備えが必要になります。風雨により不安定となる河川流域や傾斜地などの工事現場はもとより、現道上の工事においても、仮設物や保安施設などについて風水害の予防に努め、現場の安全管理を適切・確実に行いましょう。

強風に対する留意事項

- ① **保安施設に注意** カラーコーンや看板などが転倒・飛散し接触の危険があります。重りやロープでくくりつけ飛ばないようにしましょう。
- ② **高所に注意** 地上では風が弱くても、高所では強風の場合があります。安全帯を確実につけて作業しましょう。
- ③ **火花に注意** 溶接時の火花が風に乗って飛散し火災の原因になります。
- ④ **クレーンに注意** 風圧を大きく受けるので、転倒の可能性があります。しっかり固定しましょう。
- ⑤ **湾岸・河川に注意** 強風により資機材が流出する可能性があります。強風が予想される場合は安全な場所に資機材を移動させましょう。
- ⑥ **強風の後に注意** 足場等にズレや傾きが生じる恐れがあります。しっかりと確認しましょう。
- ⑦ **点検は複数で** 点検途中で事故にあった場合、単独では連絡が取れません。



水害に対する留意事項

- ① **排水設備の点検を** ゲリラ豪雨等では排水設備の許容量を超える恐れがあります。またゴミ等の堆積により本来の機能が発揮できない場合があります。
- ② **穴・段差の点検を** 降雨により、バイクや自動車の事故の原因になります。
- ③ **濡れた通路に注意** 濡れた覆工板は滑りやすくなります。手すりや保護具をつけて作業しましょう。
- ④ **緩んだ斜面に注意** 切土法面、盛土等は降雨で崩れやすくなります。危険箇所がないか点検しましょう。
- ⑤ **機械の設置場所に注意** 地盤の緩みで機械が転倒する危険があります。地盤がしっかりとした場所に設置しましょう。また河川の増水の可能性がある場合には、資機材を高所へ移動させましょう。
- ⑥ **大雨の後は点検を** 地盤の緩みで崩落、陥没等思わぬ危険があります。
- ⑦ **点検巡視は複数で** 点検途中で事故に遭った場合、単独では連絡が取れません。



土砂災害の主な前兆現象

「雨が降っていないのに川の水が濁る」、「雨の割には谷の水の量が多い」、「地鳴りがする」といった現象があるときは鉄砲水や土砂災害のまえばれですので、早急に現場を離れ安全な場所に避難するよう心がけましょう。



異常気象時に遵守すべき事項

異常気象時に遵守すべき項目として以下のようなものが挙げられます。

- ① 天気予報等で異常気象等の発表がある場合には作業中止を含めて作業予定を検討しておくこと。
- ② 工事責任者は必要に応じ2名以上を構成員とする警戒班を出動させて巡回点検を実施すること。
- ③ 警戒員は気象の急変及び非常事態に注意し、工事責任者との連絡を適宜行い、周辺の状況把握に努めること。
- ④ 警報及び注意報の解除後に作業を再開する前には、工事現場の地盤の緩み、崩壊・陥没等の危険がないか入念に点検すること。

なお、労働安全衛生規則第522条では悪天候時の作業中止基準を定めていますが、工事現場周辺及び広域の気象に気を配り、危険を察知した場合には、基準内であっても気象の状況に応じて警戒・点検・作業中止等を実施し、安全の確保に努めましょう。



気象情報を収集し、再度現場の安全管理・点検を徹底し、事故を未然に防ぎましょう



近畿管内で死亡事故発生！！



事故概要

道路にかぶさっている枯れ木を切ろうとして、被災者が梯子を用いて木に登り、切断箇所に入り込みを入れた。被災者からの合図があったので、法面下にあった2名の作業員がロープを引っ張り、切り込みを入れた箇所から上の部分を落下させた。被災者の反応がないため、下の作業員が法面の上に入り上がり確認したところ、落下し意識不明で頭から血を流して倒れているのを発見した。救急搬送したが死亡を確認。

安全帯は着用していたが確実な箇所に固定していたかは不明であり、原因については現在調査中です。



上記死亡事故の翌日には、作業員が型枠設置作業中にあやまって、足場より地面(約5m下)へ転落する事故も発生しています。こちらは、安全帯を着用しておらず、作業員が負傷(骨折・全治2ヶ月)しました。

墜落災害は重大事故の危険性が高いため各現場でも安全対策はとられていると思いますが、今回、死傷者が出る事故が発生しました。各現場におかれましては今一度、下記点検の徹底をお願いします。

- 高所作業における足場設備の設置と危険箇所が無い日々の点検の徹底
- 安全帯が必要な作業では、安全帯着用の徹底(特にフックをかける習慣を徹底させる)

熱中症対策の徹底を

屋外で直射日光にさらされる環境が多い建設工事の現場では、熱中症を生じる恐れが非常に高く、昨年度も多く熱中症の報告があります。

処置が遅れると命に関わる可能性もあるため、躊躇せずに医療機関の診察を受けることが重要であり、朝礼時に個々の作業員の健康状態を確認するようにしましょう。詳しくはあんぜん5月号を参考にしてください。

